

研究所だより

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

令和6年3月

第5号



ふれあい教室(出発式)

安芸市教育研究会次年度に向けて.....	1
【教育支援センター】	
教育支援センター運営委員アンケートより.....	3
ふれあい教室の活動(3学期)	6
【SC だより】こころこころ	7
【リレー寄稿】研究所長 安養寺 仁	8



R5 年度安芸市教育研究会 各部会「次年度に向けて」

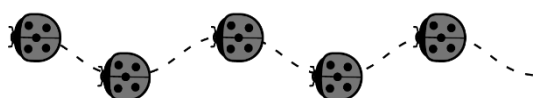
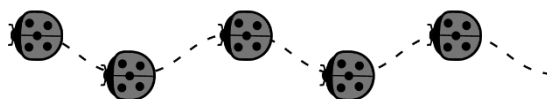


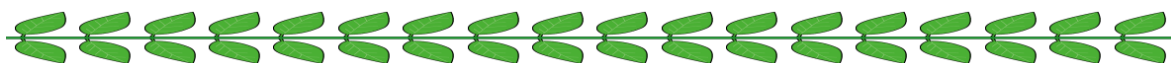
安芸市教育研究会では、これまでの教科、領域部会を改編し、7つの部会で取り組みを進めていただきました。重点目標に基づいた取り組みを行い、ふりかえりをし、次年度に向けた課題が各部会から出されています。

令和6年4月から、安芸市教育研究会は安芸市連携教育研究会となり、小中学校の連携をさらに深める会となります。各部会から出された内容を引継ぎ、来年度からも取り組みを進めていただきたいと思います。

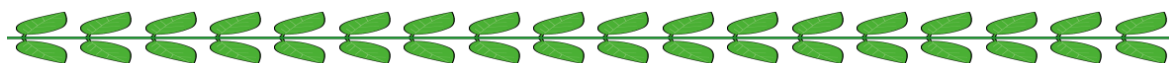
	次年度に向けて
授業づくり部会	①振り返りの充実…振り返りの視点を示す(低学年はリード文で示す。まとめにつながるような振り返り。かしこくなったこと・わかったこと。次の授業に生かせそうなこと。質問したいこと。など…) ⇒振り返りの変容の見取り ②関わり合う活動の充実…授業で1回はペア活動を実施する。(今日学んだことを伝え合うことも含む) 継続し、より質の高いものにしていきたい。
基礎学力部会	①【課題確認、目指す児童・生徒像確認】 ○年度当初に中学校の目指す生徒像、課題を共有する。 (学力調査の結果や生徒の実態など) ☆R5.1.24 の部会より R5年度中学校県版学調課題 【基礎的な計算力】…中学数学 正答率4割 【読解力】……………問題文を読み取る力に課題 (英語においても日本語で書かれている問題文の意味の理解が困難) ↓ ②【実践】中学校の目指す生徒像に向けて各校の特色や実践内容に 応じて取り組んでいく。 小学校のどこでつまずいているのか【つまずき把握】 どのような取組や支援が必要かを考えていく【取組】 ↓ ③【検証】
児童生徒理解部会	・実践交流、講演を継続していく。 ・講演はできるだけ早い時期に行う。 ・各校で取り組んでうまくいった事例の共有の機会を持つ。 その他以下のような声もあった。 ・それぞれのニーズにあった研鑽をしていけばよいのではないか。 ・R6 年度連携教育研究会について 部会のあり方については議論しても良いのではないか。 以前のように教科部会もほしいという意見もあった。
生き方部会	(1)道徳教育 ・「道徳実践シート」の継続した活用と、どのように活用したかの交流をする。 ・「道徳実践シート」の活用についての研究をしていく。 ⇒小中連携にもつながる。 (2)特別活動 ・中学校の授業づくり…他校の実践を学ぶ機会をもつ(小中連携) ・特別活動では、各学校の取組交流を継続する。 道徳と特別活動を関連させた取組についての研修が具体的でよかったので、次年度も第2弾でお話を聞く。 (3)重点課題について ・次年度へのつなぎの検証⇒重点課題は継続 ・公開授業をしたいが可能か検討 ⇒各学校の授業公開をお知らせする。 ・テーマについてのアナウンスと授業や活動の振り返りをしっかりする。

体力の向上部会	・本年度取組んだリズムジャンプについては、安芸市全体で全国体力・運動能力テストで良い結果が出ているので、8小で継続して取組む計画をしたい。 ・共通のセット運動を考えられたら良い。 ・(中)身体の硬いことを感じている。 ↓ 新年度は各校柔軟を意識した準備運動を取組む。 ↓ R6年度の第1回5月17日の会でそれぞれ確認する。 ↓ R6年度の全国体力・運動能力テストでは柔軟領域での伸びを狙いとする。長座体前屈を目安としたい。 (春から柔軟を意識した取組提案を体育主任中心に呼びかけ)
基本的な生活習慣部会	①生活リズムの取組の継続 個別ファイルをもとにめあてを立てて取組を積み重ねていく。 工夫改善点 ・結果の活用 ・チェック項目の見直し(ノーメディアチャレンジとのリンク) ・保護者の巻き込み方 ②小中連携(児童生徒同士の連携) 例:中学校の保健委員会が小学生に向けて、中学校生活について紹介する中で、睡眠時間やメディアについて話をするなど。(タブレットを使って)
ICTのよりよい活用部会	課題 ・市教研 ICT 部会で、何を扱い議論を進めるのか、どこまでを受け持つのか、区分けが明確でない。 ・現在、使っている機器が故障した場合の保証の問題がある。 保護者に、弁済を要求するのか、しないのか。このような課題を ICT 部会が検討することなのか。そのこと自体がわからない。 ・機器の更新やアプリケーションソフトを導入して欲しい場合、高額な費用が生じるため、今後、計画的に進めていただけるのか 見通しを示してほしい。だれがそれを示すのかがわからない。 ・「児童生徒、教師の活用スキルの向上を目的に、ICT 部会を活用する」など、範囲を設けないとぼやけてしまう。 ・ICT 機器を持たせることは、便利さを手に入れると同時に、危険を手にするということでもある。リスクにどのように対処するのか、それに誰が当たるのか。明確に示されていない。





教育支援センター



◇第4回教育支援センター運営委員会◇

2月27日（火）午後3時より、今年度最後の教育支援センター運営委員会を開催しました。最終回の今回は、「ふれあい教室」での活動報告や各校の実態報告、長期欠席児童生徒の実態報告、来年度にむけての不登校（傾向）児童生徒の対応や不登校予防の取組についての成果と課題などを共有する場となりました。

来年度の学習会につきましては、今年度の課題やアンケートをもとに企画していきたいと思っています。運営委員会への参加や長期欠席児童生徒調査など、1年間ご協力いただき、ありがとうございました。

令和5年度 安芸市教育支援センター運営委員会アンケートより

不登校(傾向)児童生徒の対応や不登校予防の取り組み（成果と課題）

①成果のあった不登校(傾向)児童生徒の対応や不登校予防の取り組み

関 連 機 関 と の 連 携 教 員 の 連 携	・校内支援会、職員会での情報共有を行った。 ・SC、SSW の関わり（児童・保護者面談等）。 ・支援ミーティングや校内支援会での情報共有をする。 ・校内支援会等によるアセスメントの実施や組織的対応をする。 ・専門的な見立てをもとにした具体的な助言をいただき、実践可能で有効な手立てをアドバイスいただくことができ、不登校が長期化している児童（家庭）への支援に繋がっている。 ・学校生活アンケートやQU アンケートの回答で気になる児童については早期に面談を実施する。また、学校全体の課題について共有、分析し、学級経営等に生かすことを継続する。 ・職員会で、児童について話し合う場を持ち、対応について検討し合い全教職員でベクトルを合わせた支援を行った。 ・日常生活において児童に少しでも変化があるときは、児童や保護者からの聞き取りを行い、必要であれば関連機関と連絡を取りながら初期の対応をした。
児 童 生 徒 と の 関 わ り	・各種アンケートを基にした聞き取りを行った。 ・児童の話をよく聴き、不満や不安を次の日に持ち越さないよう、その日のうちに一定の解決や納得を図って帰すようにした。 ・連絡の取りにくい家庭に対して、担任が本人の状況をつかむためタブレット端末を届けアンケート形式で答えてもらうことで当該生徒との関係維持を図ろうと取り組み始めた。 ・授業外に時間設定した木工作业。 ・SC 面談の実施。 ・SSW が玄関で朝出迎えてくれる。 ・保護者との分離不安がある児童に対する登校時の声掛け。 ・生徒指導の三機能を踏まえた支援。 ・「学校に登校する」という結果だけを求めるのではなく、本人にとって意味のある時間を過ごすことができるように支援した。 ・担任や学年団を中心に家庭訪問等に取り組み、学校との関係維持に努めている。

保護者との関わり	・朝の電話対応（丁寧な聞き取り・担任との情報共有）。 ・家庭との連携（多すぎず・少なすぎずの電話連絡、家庭に応じた対応）。 ・家庭とのつながりや保護者の精神安定につながる取組：家庭訪問、電話、SC 面談、すぐーる活用。
登校支援	・登校時間を強制しない：給食のみ、AM・PM のみ。 ・児童と相談し、午前中で帰る、途中から登校するなど、時間を限定しての登校とした。
別室	・別室や保健室等で過ごすことができる環境設定。 ・環境整備。 本人のニーズに合わせて、教室以外の「居場所」（保健室・相談室等）の環境整備を行い、居場所づくりを進めることで登校が安定（欠席しない・教室復帰できる）した。
その他	・保護者の要望で授業をライブ配信する家庭数が 2 件になった。

②不登校(傾向)児童生徒の対応や不登校の予防の取り組みでの課題

保護者対応	
児童生徒への支援	・情報共有はできているが、該当児童に対して、全教職員が共通した対応が取れていないことがある。 ・別室で対応できる教員や支援員不足。 ・不登校であった児童が、別室登校可能となった時、対応する教職員・支援員がいないことがあり、日程調整をせざるを得ない。児童や保護者の希望に添え切れていない。 ・本校の規模・実態からみると、児童支援の級外教員が必須であるが、配置されないのが大きな課題。 ・生徒同士の間関係の希薄さや、規範意識の乏しい生徒に振り回され自分の居心地の悪さを訴える生徒が多い。 ・母子分離不安、共依存・対人不安・睡眠障害。 ・初期対応。 不登校はどの児童にも起こり得るものという考えを教職員間で共有することで、すべての教職員が児童の小さな変化に注意を向け、不登校の兆候が見られた児童に対しての適切な支援に繋げること。
その他	・本人の事情より、家庭環境が要因と考えられる事案がある（複数）。 ・支援会などの会が長時間になってしまう。 ・授業改善、学級経営。 不登校を未然に防ぐための、分かる・楽しい授業づくりと人間関係づくりに努めることを継続する。 ・教員によって不登校に対する危機感の捉え方の違いがある。

③不登校(傾向)児童生徒の対応や不登校予防の取組で、新たに取り組もうとすること

- ・ Google クラスルームの活用。
- ・ 教育支援センター運営委員会で講師をしてくださった、高知市教育支援センター吉本先生をお招きし、校内研修を行う予定。
- ・ 来年度は、統合中となるので、まずは、教員の意識（新規不登校を出さない、生徒一人ひとりの居場所の保障等）を高めることが重要と考える。研究主題も「仲間づくりを基盤とした授業改善」に決定しており、組織的協働的な取り組みを充実していかなければならない。
- ・ 会の精選、協議内容の精選。
- ・ 会のゴールを明確にし、時間配分を意識した進行を行う。
- ・ 教職員の不登校予防に対する意識の差があるため事例をもとにした研修を行う。

④来年度の教育支援センターへのご意見・ご要望

- ・ 実際の事例をもとにブリーフミーティングを体験することができ、とても勉強になりました。特別な配慮が必要な児童生徒に対する、不登校(傾向)や不登校防止の取組について学習してみたいです。
- ・ 長期欠席不登校の児童生徒の実態調査について校務支援システムの長期欠席者一覧表を用いて提出する形を希望します。他市では、校務支援システム導入時から、その様にしている様です。昨年度のアンケートでも上記の内容を要望しています。
- ・ 毎月の研究所の学校訪問について不登校などの実態をお伝えしていますが、1カ月では状況に大きな変化がない場合が多いです。支援ミーティングも回数を減らす方向で動いてくれていますので、必要に応じての対応にしていきたいです。不登校の現状については、上記の調査の提出と、教育支援センター運営委員会での報告でご確認いただきたいです。
- ・ 運営委員会の時期や、回数もよかったですと思います。来年度も講師を招聘した研修があればよいと思います。





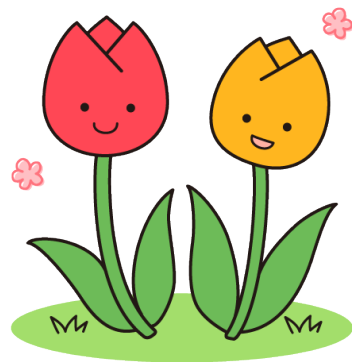
ふれあい教室



ふれあい教室の庭にたくさん植えたチューリップの花や、菜の花が咲き誇っています。いよいよ春がやってきました。

現在、ふれあい教室には小学生 10 名、中学生 8 名が在籍をしています。今年度は、4 年ぶりに野生塾が開催されたり、地域の方と交流したり大変充実した一年となりました。子どもたちも様々な活動を経験し、たくさんの人と関わることで自分に自信をもつことができました。また、3 月 13 日に中学生 3 名がふれあい教室を出発しました。通室生や卒業生の保護者の方、学校の先生方、地域の方々等、たくさんの方が出席してくださり、卒業生の「出発」を祝うことができました。ふれあい教室で仲間とともに過ごした日々を胸に、輝かしい未来へ力強い一歩を踏み出し欲しいです。

1 年間、本当にありがとうございました。来年度も、「ふれあい教室」が、子ども達の心の居場所となるよう、安心して過ごせる環境づくりを行ってきたいと思います。



こころこころこころ

2024 年 2 月
スクールカウンセラー通信
竹口 佳昭

“こころ”

『相手にどう思われているかな』『自分の発言が他人から嫌われる発言になっていないかな』『いい子ぶりが疎まれているのではないかな』などと、他人に気を遣いながら生活をしている人が多いのではないのでしょうか。気にしすぎると“こころ”が疲れて他人と会うのが億劫になります。

自分は、何を、誰を怖れているのか。何に、誰にイライラしているのか。何に疲れているのか、自分の“こころ”に問いかけてみてはどうでしょう。その正体がわかると、“こころ”が軽くなります。

自分の“こころ”の中の卑怯なところ、臆病なところ、自信のないところ、様々な自分の弱いところに気づきます。苦しいですが、自分の弱いところが見えると、なぜか“こころ”が楽になります。

自分の嫌なところが見えた時、自分をいたわってあげることが大切です。嫌なところを抱えながら、今まで一生懸命歩んできたのです。

『あんたは卑怯や、うそつきや、今日もまたや』と同時に、『おい、またやったな、やりたくないけどやっちゃったな。まあ、その気持ちもわかるけど、次からやめときや』と言ってくれる、もう一人の自分がいると助かります。極端な話、親や友だちよりも、もう一人の自分と一緒にいる時間が長いのです。例えば、15 歳の人なら 15 年間ずっともう一人の自分と一緒に過ごしてきたのです（意識しないとわかりませんが）。これからも、自分といつも一緒にいるもう一人の自分が、自分のことを理解していたわって、「今のままでいいよ」と言ってくれれば、ほんと安らぎます。

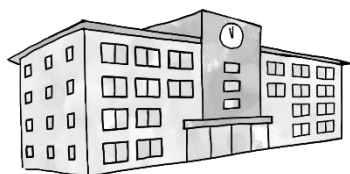
自分に厳しい人の中にいるもう一人の自分は、『今のままで OK、本当にあなたは十分頑張っているのだから、少しぐらいずるいことをしても OK だよ』と言ってあげることができないのです。『間違っただけは正しくないのだ。もっとしっかり考えて生活しろ』と、自分を許さないのです。だから自分に厳しい人は大変です。

私は、自分に少しぐらい甘くてもいいように思います。神様ではないのですから。

自分に嫌なところ、直した方がいいところ、しっかり向き合った方がいいところいっぱいあるけど、「これまで十分頑張って生きてきたやんか、ありのままの自分で OK」ともう一人の自分に言ってもらえたら、少し“こころ”が楽になって過ごせるように思います。

1 年間ご愛読ありがとうございました。





我が母校「清水ヶ丘中学校」

安芸市教育研究所長 安養寺 仁

遡ること60年ほど前、昭和39年に伊尾木・川北・土居・井ノ口・栃ノ木の各中学校が名目上統合され発足した清水ヶ丘中学校も本年度をもって閉校となります。令和6年度からは、同じ安芸市内の安芸中学校と統合され、新たに安芸中学校として新設されることとなります。時代の流れとはいえ、私の母校である清水ヶ丘中学校の名前が、この安芸市から無くなってしまうことは、本当に残念な気持ちでいっぱいです。

歴史と伝統ある清水ヶ丘中学校は、長きに亘って高知県東部の研究推進の中心的役割を担ってきた学校で、これまで「高知県教育委員会 学校表彰」「ボランティア功労賞 高知県知事賞」「高知県教育研究実践表彰」「全国環境美化教育優良校表彰」「高知県坂本教育賞」（2度受賞）など、学校独自の取組の成果が認められ、幾度も学校表彰を受けてまいりました。また、生徒会活動や部活動、駅伝大会においても、数多くの輝かしい成績を収めてまいりました。

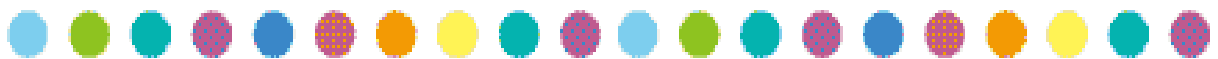
私がこの清水ヶ丘中学校の生徒であった頃は、もう今から50年ほど前のことになります。各学年が4クラスずつあり、生徒数も現在の3倍ほどおり、体育大会などの学校行事も、学年縦割りの1組・2組・3組・4組の組団で競い合い、活気に満ちた素晴らしい学校行事を全校生徒自らの手で創り上げておりました。

私の若い頃の思い出で特に印象に残っているのは、小学校でも高校でも大学でもなく、やはり清水ヶ丘中学校での3年間の思い出が強く心の中に残っております。在学当時私は野球部に所属しており、県大会出場をかけた郡大会で市立安芸中学校に僅差で敗れ、3年生の部員全員で涙したことや、最後の選手権大会で、優勝候補の高知中学校に勝利したこと、また、安芸郡市の駅伝競走大会でアンカーを任せられ、大山岬から旧安芸中学校（現在の元気館）までの7kmほどの区間を、応援で国道に勢ぞろいをした全校生徒の前をトップでタスキをゴールまで運んだことなど、部活動や駅伝大会で得た思い出は、還暦を超えた年になった今でも鮮明に脳裏に蘇ってきます。

さて、個人的な話で前置きが長くなりましたが、本年度は、新型コロナウイルス感染症も5類に移行され、全ての学校現場でコロナ前と同じように子どもたちの元気な声が学校全体に響く、活力溢れる教育活動が行われることとなりました。そんな忙しい日常の中、各学校の先生方には、安芸市教育研究所の取組にご理解・ご協力を賜り誠にありがとうございました。特に、教育研究所運営委員の皆様、教育支援センター運営委員の皆様、研究協力校として取り組みをいただいた4校の小学校の皆様、本当にお世話になりました。お陰を持ちまして、令和5年度の安芸市教育研究所としての取組を無事終了することができました。本当にありがとうございます。

最後に、新設をされる安芸中学校と安芸市内8校の小学校における更なる連携教育の充実と安芸市の教育の益々の発展を祈念申し上げ、年度末のご挨拶ならびにお礼の言葉とさせていただきます。





安芸市教育研究所

〒784-8501

安芸市土居82番地1

TEL (0887) 32-0232

FAX (0887) 35-1051

E-mail : aki-l@city.aki.lg.jp



安芸市出身 三農グループの創始者 岩崎 弥太郎